

犯罪被害者遺族による「命の大切さを学ぶ教室」の 講演効果

浅野 晴哉・松本 周

Ⅰ 問題と目的

本邦の自殺対策は、近年における自殺の実態等を鑑み令和4（2022）年10月「自殺総合対策大綱～誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指して～」が閣議決定された（厚生労働省、2022）。同大綱は「子ども・若者の自殺対策の更なる推進・強化」「女性に対する支援の強化」等を掲げ、重点施策として「女性の自殺対策を更に推進する」を新たに加えた。令和7（2025）年の自殺対策白書（厚生労働省、2025）によると、自殺者数は2003年の34,427人をピークに、2019年の20,169人が最小人数、2024年には2番目に少ない20,320人となったものの、女性の自殺者数が依然として増加又は高止まりしている。特に「15～19歳」は2015年には男性が女性よりも2倍以上上回っていたが、2024年には女性が347人と男性を上回った。加えて「大学生等」を男女別にみると、女性は男性よりも自殺者数は少ないものの、2024年は約150人が自殺しており、近年増加傾向である旨指摘されている。しかし、全国大学メンタルヘルス学会（2020）によると、全学的な自殺対策を実施している大学は6割で、私立大学が半数未満、さらに今後の実施予定がない大学は3割以上という。また、大学生に対して自殺予防に関わる教育研修を実施している大学は3割程度で、半数は今後の実施予定もないとの結果であった。これらの背景としては、自殺予防の必要性は認識しているものの、講師や時間の確保と、全学的な合意形成が困難という理由が挙げられている。

このような現状に対して衛藤（2025）は、大学生は自殺が多くなる年代として「相談すべきことを、相談すべき人に、相談すべきタイミングで、相談できるようになる」取組を早期に実施すること、加えて大学生になる以前の中高生の時期からの自殺予防に向けた取組も重要である旨指摘している。この指摘は、中学・高校・大学という精神発達段階において最も不安定になる青年期全般において途切れることのない自殺予防教育が必要であると還元できよう。さらに、太刀川ら（2021）は、大学生への自殺予防教育の可能性として、エビデンスのある新たな大学生のための自殺予防対策を打ち出し、普及させていく必要性を指摘している。先の自殺対策白書（2025）によると、児童生徒の自殺対策に資する教育の実施として「児童生徒が命の大切さを実感することができる教育の推進」が掲げられている。宮城県（2024）においても先の自殺総合対策大綱の見直しを受け、令和6（2024）年に宮城県自死対策計画を策定している。同計画の重点施策として「(6) 子ども・若者の自死対策を更に推進する」が掲げられ、同事業として宮城県警察が教育機関と連携し、中学・高校生に対し犯罪被害者等の講演及びその心情伝達を取り入れた「命の大切さを学ぶ教室」（以下「講演」という。）を開催している。同講演は、犯罪被害者等が、犯罪から受けた様々な「痛み」、子どもを亡くした親の思いや生命の大切さ、被害者も加害者も出さない社会を希求する等の思いを伝えることにより、犯

罪被害者等への配慮・協力への意識をかん養し、犯罪は許されないという規範意識の向上を図ることを目的とするものである。浅野（2015）は、この講演の受講者に対して、「命の大切さ」質問紙尺度（浅野、2010）により、講演受講前と講演受講後と比較したところ、講演受講後の受講者の「自己肯定感」「対人規範」「生きる意思」「社会的絆」「犯罪規範」「感受性」が統計的に有意に高くなり、生きていくことを肯定的なものに見直す効果及び自殺予防効果を明らかにし、箕口（2011）が指摘する心の問題を抱えやすい集団に対する臨床心理的地域援助の予防的介入の一つと指摘している。

そこで、本研究においては、近年自殺が懸念される女子大学生に対して自殺予防教育の一環として、中学・高校生においてエビデンスのある「命の大切さを学ぶ教室」を開催することとし、犯罪被害者や加害者にもならず、かつ、自殺予防に寄与することを目的とした。よって、本研究は、上記講演において実績のある犯罪被害者遺族による講演会を企画し、その効果について量的・質的研究の混合研究により検討することとする。

なお、同講演者に対しては、本研究及び講演の目的について、講演前に十分説明し、講演後においても、本稿を確認いただき了承を得るなど倫理的配慮を十分行った上で、実施したものである。

II 研究1（量的研究）

キリスト教文化研究所 2024 年度第1回「多民族」グループ公開講演会 「命の大切さを学ぶ教室 最愛の娘を失って 犯罪被害者遺族の想いと願い」

開催概要等

第1回講演会は、2024年7月12日（金）に本学において、八島定敏氏が最愛の娘和佳子さんを殺害された悲痛な経験について講演いただいた。八島氏は、先に述べた中学・高校生に対する「命の大切さを学ぶ教室」の講演者であり、他にも宮城県及び宮城県警察などから依頼を受け講演を行うなどの実績を持ち、宮城県犯罪被害者等支援条例に基づく有識者会議「宮城県犯罪被害者等支援審議会委員」でもある。なお、講演内容は筆者と八島氏は緊密に連携を図ったものである。

八島氏の講演は、犯罪被害で最愛の娘を失った遺族の心情を伝える「死の教育」であった。つまり、突然に家族を喪失した現実、その後の残された遺族の辛さ、悲しみ、怒りなどの心情及び「命は個性」である旨伝達いただき、聴講者にとっては死を直視することから、今生きていること自体が奇跡であることを体感できる内容であった。

聴講者に対しては、講演への動機付けを行う事前質問紙、更に心理的に動揺が見られた聴講者へのフォローアップとしての事後質問紙を作成した。加えて、本学の持つ社会資源を最大限に生かすため、学生相談室及び特別支援室等学生課におけるケア体制を確立後に講演する形式とし、質問紙にその旨を掲載するなど調査手続に基づく倫理的配慮を徹底した。なお、本講演における上記アンケート調査については、本学心理行動科学科犯罪心理学ゼミ4年生の卒業研究の一環として調査依頼を受けた。そのため、講演者及び聴講者への配慮を最大限可能にできるよう公認心理師・臨床心理士である教員及び牧師・悲嘆ケア専門家である教員の指導の下で質問紙を作成、実施した。

講演効果の検討

聴講者は、学内外から約 60 人が集まった。

アンケート調査は、大学生を対象として任意で行った。本研究における質問紙の内容は、Table 1 のとおり 17 項目、6 つの下位尺度から構成されている「命の大切さ」質問紙尺度（浅野、2010）により、講演受講前と講演受講後にそれぞれ実施した。なお、同調査において、上記倫理的配慮事項を丁寧に口頭及び質問紙に掲載して実施した。

統計分析結果 分析対象者は、46 人であり、統計ソフト IBM SPSS29 により講演受講前と講演受講後と比較したところ、講演受講後の受講者の「自己肯定感」($t(45) = 4.03, p < .001$)、「対人規範」($t(45) = 2.33, p < .05$)、「生きる意思」($t(45) = 3.98, p < .001$)、「社会的絆」($t(45) = 5.06, p < .001$)、「犯罪規範」($t(45) = 3.09, p < .01$) 及び「感受性」($t(45) = 3.81, p < .001$) が統計的に有意に高くなり、「自他の命を大切にす」という生きることを肯定的なものに見直す効果及び自殺予防の効果が明らかとなった。各結果の平均評定値は、Table 2 に示す。

Table 1 「命の大切さ」質問紙尺度と項目

尺度名	NO	質問内容
自己肯定感	1	あなたは、「よくやったなあ」と自分をほめることがありますか
	2	あなたは、人の役に立つ活動をしていますか
	3	あなたは、何かをやりとげたという体験をしていますか
	17	あなたは、自分にいいところがあると思うことがありますか
対人規範	4	あなたは、いじめは悪いことだと思うことがありますか
	5	あなたは、人を殴ることは悪いことだと思うことがありますか
	6	あなたは、親に反抗することは悪いことだと思うことがありますか
生きる意思	7	あなたは、命は大切なものだと思うことがありますか
	8	あなたは、命を大切にしていますか
	9	あなたは、長生きしたいと思うことがありますか
社会的絆	10	あなたは、自殺はしてはいけないと思うことがありますか
	11	あなたは、後に残される人の気持ちを考えると自殺はできないと思うことがありますか
犯罪規範	12	あなたが死ぬと親や友達を悲ませてしまうのが辛いと思うことがありますか
	13	あなたは、犯罪のない社会を望むことがありますか
感受性	14	あなたは、犯罪は許せないと思うことがありますか
	15	あなたは、命ってすばらしいと感動することができますか
	16	あなたは、自然のすばらしさにふれて感動することができますか

Table 2 同質問紙尺度の平均評定値 (SD) N=46

尺度名	講演前	講演後	t 値
自己肯定感	3.70 (.85)	3.96 (.80)	4.03***
対人規範	4.14 (.44)	4.30 (.46)	2.33*
生きる意思	4.09 (.89)	4.35 (.89)	3.98***
社会的絆	3.82 (1.17)	4.43 (.90)	5.06***
犯罪規範	4.75 (.44)	4.89 (.31)	3.09**
感受性	4.03 (.94)	4.33 (.81)	3.81***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

自由記述結果 自由記述の引用は、本質を歪めない範囲で事実関係に修正を加え、要約する。

・ 私は、あまり生きることを重要視しておらず、死ぬのなら若いうち、30代、いや明日でも後悔はないと思っている。しかし、今回の講演を聞いて、残された人の気持ちを想像できて、今後、もう少し命を大切にしようと思えた。

・ 嫌な事やしんどいことがあるともう死にたいと思ってしまう自分もいて、それは本当によくないことだと思いました。……命は大事だと再確認しました。今後活かしていきたいと思いました。

・ 私が亡くなったとき、家族や友人は悲しむのかを考えました。私は死について重さがあまり分らなかったが、本日の講演から、被害者遺族の胸の内を聞き、死ぬということの意味が改めて理解できました。大事な家族の死を見たくないが、家族も私の死は見たくないと思い、命は大切だと思いました。

・ 今まで、他者と違うことに違和感を感じ、葛藤していました。しかし、他者と「異なるものが個性であり、命」という言葉に救われた。……自ら命を絶とうとしたこともありました。しかし、私は私であり、私は私が輝ける場に出会うことで、考えが変わったかなと思った。八島さんの言葉一つ一つが胸に留まり、自分の経験したことはこれっぽっちしかないと心が楽になった。

・ 私は死にたいと思うことがある。今日の講演を聞いて、私が死んだら両親は悲しむだろうなということは分かったけれど、自殺はしてはいけないことだとは思わなかった。

等自殺及び死に関して抱えていること、それを吐露する機会、さらに死別により残される者の現実を知る必要があることが明らかとなった。また、上記のとおり、大学生として抱えている命は自分自身のみという死生観から、「残される者」の心情理解へと広がりが見られるなど「命を大切にする」という自死防止となる態度変容が見られた者も認められた。

その他は、「命について十分に考えることができたと感じた」「考えたことはなかったが、いきなり死を迎えてしまうかもしれない。だからこそ今を大切に一生懸命生きていこうと感じた」「親より先に死ぬ」ことがないように生きようと思いました」「今回の講演に参加させていただいたことも心から感謝するとともに、思い出す辛さを抱えながらお話を下さった八島さんへ感謝をさせて頂きたいです」など今以上に命を大切にするという態度そして八島氏への感謝の言葉が多く見られた。また、「今後も同じ様な教室を開催してほしい。できれば、付属の中学、高校でも開催した方がよいと思います」など本講演会の継続を要望する声も見られた。

まとめ

第1回目となった本講演会は、量的研究を中心に実施した。その結果、大学生の死生観に変容が見られた。具体的には、現実生じた死を見つめ直すことで「命を大切にする」という態度の変容が見られたのではないかと考えられる。また、同講演の継続を要望する声もある。よって、定期的な同教室の介入が必要と考えられる。なお、自由記述においては自死に関連した内容のみを抽出した。詳細な質的研究は、研究2で実施することとする。

III 研究2 (質的研究)

キリスト教文化研究所 2025 年度第 1 回「多民族」グループ公開講演会 「命の大切さを学ぶ教室 あなたはママの自慢の子」

開催内容等

第 2 回講演会は、2025 年 6 月 20 日（金）に本学において佐藤早織氏が、最愛の息子翔樹さんを交通事故で亡くされた経験について講演いただいた。佐藤氏は、「みやぎ交通事故ハナミズキの会」代表をなされ、交通事故や事件などにより命を奪われた方々の遺品等を展示し、命の大切さを訴える「生命のメッセージ展」を開催し、また、高校生に対する「命の大切さを学ぶ教室」や自治体及び企業における交通安全教育の講演も行っている。

佐藤氏は、交通事故で息子・翔樹さんを亡くし、その悲痛な経験として、凄惨な事故現場、その後の裁判において無謀運転の現実、加害者の態度、遺族としての孤独や精神的苦しみなどから、命の重さと交通安全の重要性を強調なされた。そして、命の授業の意義や、加害者の責任意識の欠如についても問題提起なされ、「命を大切にし、交通ルールはもちろん、一瞬の気の緩みで命を失う現実を想像してほしい」と加害者にも被害者にもならないよう訴え、最後に、犯罪被害者等の支えとなる人の存在の大切さについてもお話しいただいた。

講演効果の検討

聴講者は、学内外から約 40 人が集まった。

前回の研究 1 は、質問紙による量的効果の測定を行った。結果は、前回の講演を聴講した学生は講演受講前より命を大切にする態度が高く変容及び自殺を踏みとどまる態度に変容することが明らかになった。そこで、今回は、質的効果の測定を行うべく、アンケートフォームにより講演受講後の感想について自由に記述してもらった。なお、本アンケートにおいても研究 1 と同様に聴講者の任意によって実施した。

自由記述の分析 一般的に自由記述という質的データからの分析は、個々を詳細に把握できるが得られた結果の客観性や実用性は高くないことが指摘されている（西村・清水, 2021）。そこで、今回は、質的研究における自由記述やインタビュー記録のようなテキスト型データを計量的に分析できる計量テキスト分析ソフトの KH Coder3（中村・周・樋口, 2025）を用いて分析することとした。

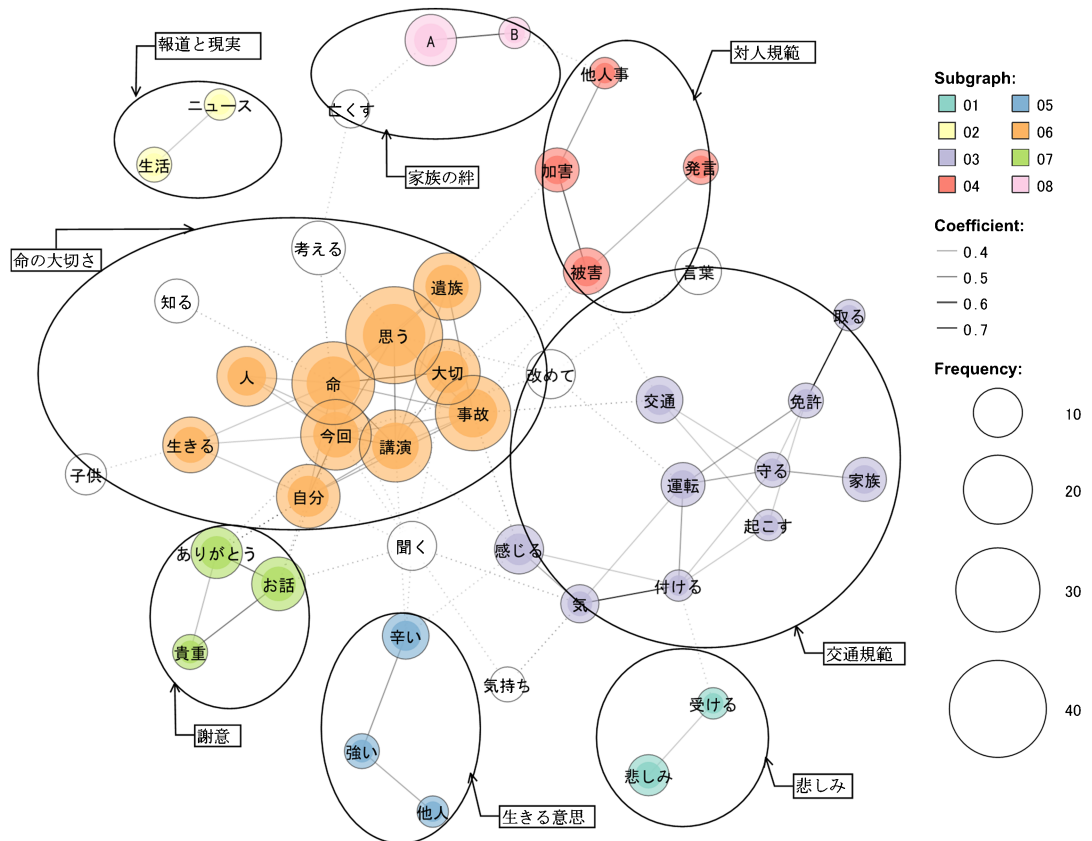
聴講者のうち、32 人から自由記述の回答が得られたものの、そのうち教職員及び学外者の 4 人については分析対象から除外し、残りの 28 人の学生を分析対象とした。分析の際、固有名詞については、「A」「B」に変換した。誤字・脱字を修正し、「いのち」「生命」「命」のように意味が同じで異なる表記の語を 1 つに統一するなどクレンジングして分析に用いた。これらの回答データについての総文数は 103、総抽出語数は 3,119、異なり語数は 558 であった。抽出語リストは Table 3 に示す。

抽出後同士の関連性を明確にするために共起ネットワークを作図することとした。共起関係の算出には、Jaccard 係数を使用し、抽出後の最小出現回数は 4 回と設定した。その解析結果の共起ネットワークは、Figure 1 に示す。

Table 3 抽出後リストの例（出現回数4以上51語）

出現回数	単語					
40	思う					
29	命					
24	事故					
22	講演					
21	今回					
19	遺族					
18	大切					
17	自分					
15	人					
13	生きる					
12	お話	考える				
11	A	ありがとう				
10	感じる	聞く	改めて			
9	言葉	交通	被害	辛い		
8	加害	家族	運転	知る		
7	子供	悲しみ				
6	出来る	亡くす	気			
5	気持ち	参加	生活	発言		
5	免許	貴重	向き合う	守る		
4	ニュース	事件	他人	他人事	強い	
4	B	学ぶ	起こす	取る	想像	
4	付ける	本当に				

Figure 1 KH C0derを活用した「命の大切さを学ぶ教室」における自由記述の解析結果



本共起ネットワーク図からは、8つのサブグラフが示された。出現頻度の多い抽出語であるサブグラフ06「思う」「命」「事故」「大切」「講演」などは、交通事故遺族の講演から今生きていること自体が大切であるという現在の自己存在を大切に示される態度が示され本講演趣旨と合致する態度が示されていたことから、「命の大切さ」と命名した。次に多く共起しているのがサブグラフ03「感じる」「運転」「交通」「守る」など交通事故を起こさない規範意識の向上が示されていたことから、「交通規範」と命名した。サブグラフ01「悲しみ」「受ける」は、交通事故遺族の現状を知る悲しみととらえ「悲しみ」と命名した。次にサブグラフ05「辛い」「強い」「他人」は、人を失う辛さを知り、自他の命を大切に示していく態度の強化が示されたことから、「生きる意思」と命名した。サブグラフ08「A」「B」「亡くす」は、Aは演者の姓であり、Bはその息子の名であり、家族の喪失とその絆について示されたことから、「家族の絆」と命名した。サブグラフ04「被害」「加害」などは、加害者や被害者

Table 4 グループ名、共起語及び自由記述の合致

カテゴリー	主な共起語	主な自由記述
命の大切さ	思う、命、大切、自分、遺族、講演、事故、今回、生きる、人	「今回命の重みや大切を学び直すことが出来ました」「自分の命と向き合うとともに、少しでも遺族の方々の力になれるような何かができる人間を目指していきたいと思いました」「辛い時は今日心に刻んだ「生きてくてもでも生きられなかった人たちがいる」ということを思いだして生きていこうと思います」
交通規範	交通、運転、守る、免許、取る、家族、起こす、感じる、気、付ける、	「車を運転する機会が増えるため、改めて交通ルールを守り、安全に気を付けようと思いました」「事故を起こさないこと、少しでもご家族、被害を受けた方が回復できるように考え、行動していこうと思いました」「命は自分のものだけではないと強く感じる」「交通事故を起こさないためには、“気を付けて運転する”という言葉だけではなく、「命の大切さを知る」ことが重要だ」
悲しみ	悲しみ、受ける	「被害を受け」「誰かの悲しみやこれから起こってしまう事故に真剣に向き合っていこうと思いました。」
生きる意思	辛い、強い、他人	「大切な人を失う怖さ、辛さ、残酷さも知ることが出来ました。自分の命も他人の命も優劣つけることなく大切にしたいと強く思いました」
家族の絆	A、B、亡くす	「Bくんを亡くしたA様の悲しみは計り知れません」
対人規範	被害、加害、他人事、発言	「交通事故は他人事のように思っているとAさんはおっしゃっていましたが、どのタイミングで被害者、加害者になるか分からないため、1つ1つ、1日1日を大切に過ごそうと思いました」「加害者、被害者の関係だけでなく、悪意のない第三者からの発言が、人を傷つける」
謝意	ありがとう、お話し、貴重	「“当たり前の日常”は存在しないこと、今自分がどれだけ幸せな環境にいるのかを改めて認識し、この日々に感謝して生きて行こうと思いました。この度は貴重なお話をありがとうございました」
報道と現実	生活、ニュース	「ニュースで得られる情報のみを知っているだけで、遺族の方の心情や事故後に遺族の方がしなければならないことを知らないと感じました。また、被害者にも加害者にもなりうるのだと改めて感じ、注意を忘れずに生活していこうと思いました」

ならないことのみならず、人を傷つけない態度が示されたことから、「対人規範」と命名した。サブグラフ 07「ありがとう」「貴重」などは、生きていることへの感謝及び演者に対する謝意の態度が示されたことから、「謝意」と命名した。サブグラフ 02「生活」「ニュース」は、ニュースでは知りえない遺族の現実を直視することで、現実生活に留意していく態度が示されたことから、「報道と現実」と命名した。これらの関係性は、Table 4 に示す。

以上のとおり、共起ネットワークを作図したことにより、8つのカテゴリーを見出せた。その結果、「命の大切さ」や対人関係における規範意識の向上という従来の効果に加えて、遺族の悲しみや死者とのつながり、また、報道と現実を直視し、これら交通事故を避けるための運転への注意向上、そしてこれら全てを提供した演者への謝意という新しい講演効果の側面が明らかになった。

なお、本講演の自由記述においても

- ・ 病気で親を亡くしており、佐藤さんのお気持ちに共感する部分がありました。家族を亡くした苦しみ、できるなら自分も親と同じ場所に行きたい、逃げたいと考えることもあります。佐藤さんの翔樹くんと向き合っている姿がとても強く見えました。本当に今回は講演会を開いていただきありがとうございました。

というように死と向き合い、悩み苦しんでいる大学生が、本講演により、遺族は死者とつながりを持つことが大切であること（浅野，2025；Klass et al., 1996）を知ることができ、今まで悩み続けていた自分自身を肯定できる心理教育となったと言えよう。

総合考察

研究1は、質問紙調査による量的研究により、犯罪被害者遺族の講演が女子大学生の自殺予防教育に寄与するかを検討した。その結果、「自己肯定感」「対人規範」「生きる意思」「社会的絆」「犯罪規範」「感受性」が統計的に有意に高くなり、生きていくことを肯定的なものと思直す効果及び自殺予防の効果が明らかとなった。

研究2は、自由記述の分析による質的研究により、上記の側面のみならず、犯罪被害者遺族という当事者の生の声を聴くことによって、遺族の悲しみや死者とのつながり、また、報道と現実の直視、交通事故を避けるための交通規範等新しい講演効果が明らかとなった。つまり、大学生であるからこそ、当事者の声に真剣に向き合い、現実を直視することで、犯罪の被害者や加害者にもならず、さらに一層自他の命を大切にしていこうという態度が形成される可能性が示唆された。

今後の展望

研究1及び2の講演を継続してきた。これは多民族研究所として社会的にマイノリティグループである犯罪被害者等の人権教育及びその向上を図る目的としての重要な取組である。そして、本研究結果からは、本邦の大学が抱えている自殺予防教育の在り方として十分なエビデンスが得られた教育プログラムの一つではないかと考えられる。

加えて、通学の際に、自家用車を運転する大学生にとっては、「交通規範」が一層高まる教育の一

つではないかと考えられる。つまり、従来の交通安全運転教育に加えて、なぜ安全運転が必要なのかという根幹を問え、かつ、エビデンスのある本講演は、交通事故予防教育としても検討していく必要性が示唆された。

このように、大学生であるからこそ、犯罪被害者や遺族等当事者の声を直接触れる機会を作ることが、大学教育が行うべきことであり、かつ、多民族研究グループとしても取り組み続けなければならない研究領域である。

付記

2025年3月に本学学芸学部心理行動科学科を卒業した須田翼氏・松本詩音氏・三浦那月氏・宮内莉子氏におかれましては、研究1における質問紙調査に御協力いただいたことに対しまして、改めて謝意を表します。

謝意

本学における初の講演会を快くお引き受けくださいました八島定敏氏、ならびに、第2回講演会において御講演を賜りました佐藤早織氏のお二人の御尽力により、本学学生にとって、上記研究結果のとおり、大変有意義な講演会となりました。ここに改めて深甚なる謝意を表し、御礼の挨拶とさせていただきます。

引用文献

- 浅野晴哉 (2010). 中学生の死生観の変化に関する研究Ⅱ「命の大切さを学ぶ教室」の質問紙尺度の作成と効果測定 日本心理臨床学会第29回大会発表論文集、322.
- 浅野晴哉 (2015). 東日本大震災被災県における中学生の命の大切さに関する態度の変化 心理臨床学研究, 33(4), 417-422.
- 浅野晴哉 (2025). 警察の心理職における犯罪被害者等支援の役割 犯罪心理学研究, 62(S), 15-28. https://doi.org/10.20754/jjep.62.S_15
- 衛藤暢明 (2025). 大学生の自殺予防について 令和7年版自殺対策白書, 68. <https://www.mhlw.go.jp/content/001581171.pdf>
- Klass, D., Silverman, P. R., & Nickman, S. (1996). *Continuing bonds: New understanding of grief* Washington, DC: Taylor & Francis
- 厚生労働省 (2024). 自殺総合対策大綱～誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指して～. <https://www.mhlw.go.jp/content/001000844.pdf>
- 厚生労働省 (2025). 令和7年版自殺対策白書. https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/jisatsu/jisatsuhakusyo2025.html
- 箕口雅博 (2011). 改訂版臨床心理地域援助特論. 財団法人放送大学教育振興会
- 宮城県 (2024). 宮城県自死対策計画. https://www.pref.miyagi.jp/documents/21979/r5_scplan_honbun.pdf
- 中村康則・周景龍・樋口耕一 (2025). 計量テキスト分析および KH Coder を用いた論文の執筆・査読チェックポイント—明示すべき点と分析結果の記述を中心に—立命館産業社会論集 61(2), 35-50. https://doi.org/10.15077/jsetstudy.2025.2_348
- 西村奏咲・清水忠 (2021). テキストマイニングを用いたアンケート解析 薬学研究 5, 1-5. <https://doi.org/10.24489/jjphe.2020.009>
- 太刀川弘和・高橋あすみ・安宅勝弘・三井信幸・布施泰子・白鳥裕貴・石井映美・渡辺慶一郎・丸谷俊之・堀正士・川島義高・小田原俊成・岡本百合・松原敏郎・梶谷康介 (2021). 大学の自殺予防対策に関する現

況調査 大学のメンタルヘルス 4, 71-78. https://doi.org/10.60198/jjemh.4.0_71
全国大学メンタルヘルス学会 「大学生の自殺予防プログラム全国開発研究」研究班 (2020). 大学の自殺予防対策に関する現況調査結果報告書. https://jacmh.org/img/j-201225_1.pdf